

郷土唱歌

作詩 石丸敏一 (佐伯市)

作曲 吉田恒三 (京都師範学校教諭)

資料提供 佐脇貫一 (佐伯市長良)

まえがき

たので、掲載しました。

この資料は、去る十一月十二日より三日間、文化会館 味尽きないものがあります。

で催した「佐伯史談三十年の歩みをささえた孔版展」に、 明治三十六年の作詩ですから、昔のことが偲ばれて興

会員佐脇貫一氏が出品されたものです。 ・仮名づかいのみ改め、他は原文のままです。

珍らしい歌だから写しとりたいと言う希望者が多かつ ・作詩者石丸敏一氏について、御存じの方はお教示下

一 九十九浦の名も高く 南海部の首府なるぞ 世々のあとなる天主台

ふるき先祖の昔より 北に聳ゆる城山や 松の木の間にはの見えるて
われらが住める郷土の歌 南を流る番匠川 いまも残れり城の跡

いざやうたわん声あげて 山の姿も川の瀬も 河にかゝれる池舟の

二 西に南に道ひらけ 流れは清く森ふかし 橋のあなたは大師山

葛の港遠からず 森にちなめる毛利氏が 山々青くとりかこみ

佐伯の町はうるわしく 長瀬 池田の野はひろし

六 川より山の裾^{すそ}かけて

一〇 女島 長島 大江灘

一四 源林公に寛龍^{りきりゆう}公

たちならびたる家々や
市^{まち}はたてよこたゞしくて
くまなきまでに栄えたり

わきてゆかしき岡の谷
春の桜の花の香に
かたみの石も匂^{にお}うらん

いづれ劣らぬ英主にて
おしえをのこす四^し教^{きやう}堂
文武の誉世にひびく

七 ところ治むる郡役所

一一 春秋ごとの眺めよく

一五 筑蔭 米華 芳洲や

いふも更なりさまさまの
役所 銀行 商店は
ここにつどいて賑^{にぎ}わしく

人の心はいときよし
四季の氣候もほどを得て
冬もしら雪みるは稀れ

秋月 伯起その外に
人材いでし佐伯藩
祖先のはまれ忘るゝな

八 大路小路のはしばしに

一二 仰げば遠き文祿の

一六 峰々多くつらなりて

諸宗の寺も数多く
今はひらけし学校に
昔のことと思ひみよ

朝鮮役にしたがいて
江原^{かうげん}一道なびかせし
高政公の名はたかし

平野はうちに少きも
田畑ひらけて村々の
土地には出^いる産物^{もの}のあり

九 馬場の大松色ふかく

一三 君がいさおのしるしとて

一七 蒲戸岬と宇土崎と

並木の櫨^{はせ}はもみじする
うぶすな神^{かみ}の明神ぞ
そこら近くに見ゆるなり

つくりなしたる鶴谷城
矢筈^{やはす}毛利のいしずえを
きずき伝えて香^{かほ}しき

なかをつつめる佐伯湾
大浦小浦かずかずの
海には尽きぬ宝あり

一八 山越え野越え里こえて

港入江に舟うかべ

見つゝ過ぎんかいく村を

知れる郷土こそたのしけれ

二二 神武の帝東征の

かしこき跡をしるされし

日向泊も島のうち

みかどの井戸は今もあり

二六 早瀬を下る筏舟

土器屋河原は香魚もよく

龍護寺村の観音や

久部の大師は霊地なり

一九 葛港をたちいでて

ゆげば上浦 八幡村

沖にたゆとう 蟹小舟

霞が浦になみ白し

二三 八幡まわれれば鶴岡の

村におかしき白潟ぞ

むかし網引きしところとて

ここらあたりは海なりき

二七 弥生は山のにぎわいて

里の菜種も美しく

皐月は藤の檉野村

秋は上岡 脇の野ぞ

二〇 瀑に名を得し浅海井や

二栄 津井は家しげく

祭にぎわう八幡の

戸穴はたれも知りつらん

二四 変わればかわる世の中よ

古市村は佐伯氏の

城下の跡ときこゆれど

盛えしあとの影もなし

二八 床木の隧道と伊賀越えを

いでつこゆれば明治村

民は豊に里ひらけ

鶴岡村につづくなり

二二 ここより見ゆる大入島

波に横たう島影に

守護 石問はいとちかく

塩内は池洲のあるところ

二五 名のみ残れる柵牟礼の

年へし杉にこととえど

峯の嵐の夢を吹く

音にも今は知られじな

二九 霊験しるき尺間岳

御山のぼりは絶えまなく

麓の宮の愛宕社も

年の祭りは賑あえり

三〇 朝な朝なに牛曳きて
木の実をひさぎ薪売る

業につとむる里の女は
似たり都の大原女

三一 上野 中野は人も知る
ここは製紙の名産地

その名産の名をあげし
野々下翁の名を知るや

三二 小倉と江良の別れ道
馬子の唄きく藪かげや

番匠積はその昔
罪人斬りし所なり

三三 穴居のあとと伝えいう
風戸の岩窟は奥ふかく

岩窟かよえる丁子口
小川は蕎麦の名どころぞ

三四 因尾は道も遠けれど
紅葉の錦しくころは

ゆきても見よや彼の谿に
史にもしるき古戦場

三五 川原木村に出でくれば
上ればゆかん日向路や

下ればかえる直見村
畑も山地もひらけたり

三六 路は直見か切畑か
須垂の坂を界にて

ここぞ十年の修羅のあと
祇園神社はこのさきぞ

三七 廻ればもどるもとの道
池船橋をうちわたり

隧道の中山ぬけゆけば
堅田 青山路遠し

三八 龍王山は巖々として
裾を流るる堅田川

流れに沿える柏江は
昔時天領なりしとか

三九 松風清き江国寺
鐘のひびきを野に聞きて

夕しずかに暮るるとき
人は家路にいそぐなり

四〇 宇山 城村 岸河内
はなしに残る波越坂

夏草しげる大越は
つわものどもが夢の跡

四一 梅になだかき石内の
野みちを右に入込めば

西野河原は水かれて
むかいの畑に森みゆる

四二 空を蔽へる大杉の
かげにたちたる墓じるし

昔忘れていまわしも
弔う人もなかるらん

四三 哀れ朽ちたる石碑に
苔むし草はしげれども

四百余年のあと留むる
これぞ惟治父子の塚

四四 武名四隣にかくれなく
大友一の旗頭

惟治はどのものものふも
ああ天なるか命なるか

四五 無実の罪に落されて
尾高知山の露とちる

蕾もともに千代鶴が
のこる怨みはいくばくぞ

四六 おなじ流れの惟定が
薩摩隼人を敗りたる

府坂の奥や長瀬原
世に勇ましきあとほここ

四七 花は桜木人は武士
そのもののふの名をしるす

桜の名所黒沢は
谷の河鹿の声もよし

四八 けむりのどけき炭焼の
山口のぼる轟坂

峠の山路ふみみんも
道のたよりぞ後にせん

四九 木立通いをまちうけて
乗れば舟路のおもしろや

松の蔭はう茶屋が鼻
綱うつ舟はぼらうちか

五〇 大野大根や芝薪
山ふかければ鹿もすむ

その入江に川岸に
鯊をつりすもこの村よ

五一 元越山は近けれど
先は舟路を中浦に

ゆきても見んか吹 松浦
羽出 中越 丹賀浦

五二 いざ梶寄に梶よせて
坂をつたえば鶴見崎

岬遥につきいでて
みよ望楼はそこにあり

五三 みわたす方は涯もなく
四国の山も中国も

島影遠くうちかすみ
浪に白帆もちらちらと

五四 眼下に見ゆる大島の

砂は真白く松青く

沖につきたつ灯台は

音にきこえし水の子ぞ

五五 中浦こせば米水津の

竹の浦廻に網ひくや

名もなつかしき宮の浦

色利とよぶはおかしけれ

五六 浦代村は繁華の地

峠の桜春はよく

小浦の神社粟島と

ここの閻魔は名も高し

五七 きしめき崎や芹崎や

湾ひろき入津村

諸国の船はとまがかり

沖に浦人釣すなり

五八 かしこき帝の舟泊めて

御旗なびけし畑の浦

いつきまつれるみやしろを

仰ぐもいとど尊けれ

五九 楠本 河内 西の浦

昔がたりのうつろ舟

話にききて早ゆけば

のこるは蒲江 名護屋村

六〇 八日薬師にゆきみんか

佐伯につゞく蒲江港

まちのかたちもととないて

港に船のかけしげし

六一 沖にかすめる深島は

罪人やりしところとか

ここの海は漁場にて

屋形の島はけしきよし

六二 みさきめぐれば猪串の

湾ふかく港よく

さきは森崎 丸市尾

いまこそつきね葛原

六三 眺めにつゞくめがね岩

くだけて散るか浪の花

浜の蛤味きよき

波当津浦はわがはてぞ

六四 村々多く土地肥えて

野にも浦にも宝庫

九十九浦とふるくより

つたえつたえし佐伯藩

六五 今ぞ昔にまさりたる

われらが郷土を忘るべき

はまれの後をうけつぎて

つとめ励まんいそしまん

明治三十六年十月十四日

佐伯町士族 石丸敏一作

郷土唱歌

へ調

二拍子

京都府師範学校教諭

吉田恒三作曲

快活に



5̣. 5̣. 6̣. 5̣. | 3̣. 2̣. 1̣. 1̣. | 2̣. 2̣. 1̣. 2̣. | 3̣. 0̣. |
 7 - ジュ - 7 ウ ラ ノ ナ モ タ カ 7



3̣. 5̣. 5̣. 3̣. | 6̣. 6̣. 5̣. 3̣. | 2̣. 2̣. 3̣. 2̣. | 1̣. 0̣. |
 7 - ル キ ミ オ ヤ ノ ム カ シ ヨ リ



2̣. 2̣. 1̣. 2̣. | 3̣. 2̣. 1̣. 6̣. 6̣. | 5̣. 1̣. 1̣. 2̣. | 3̣. 0̣. |
 7 レ ラ カ ス メ - ル - サ ト ノ ウ タ



1̣. 3̣. 5̣. 3̣. | 2̣. 2̣. 2̣. 2̣. | 1̣. 3̣. 2̣. 5̣. | 1̣. 0̣. |
 1 - サ ヤ ウ タ ハ ン コ エ ア ゲ テ